

令和4年3月1日に思う

コロナ禍でも、意義ある一日になりました。

2月5日、第565回を数えた朝拝式（村指定、民俗無形文化財）は、コロナ禍のため“身内”で行われました。が、思いがけない方にお立ち寄りいただきました。

重要無形文化財保持者、いわゆる人間国宝の大倉源次郎先生（能楽大倉流小鼓方十六世宗家）に。もちろん人間国宝（の方）が本村を訪ねてくださるのは初めてであります。

今回のご縁は、かねてよりわが村を絶賛くださっている奈良インターカルチャー主宰の佐野純子女史により実現したものであり、あらためて感謝申し上げたいと思います。

師は、気高く凛々しさを醸しながらも、優しく気さくに能楽の歴史や果たしてきた使命とともに日本の文化芸術についてお話をしてくださいました。

その上、小鼓を披露していただき、驚いたことに、その宝物を私や同席していた面々にも直に打たせてくださいました。午後には金剛寺を訪ね、弓場教育長の解説に興味深く耳を傾け、朝拝式に感銘されたようであります。

今回、多くの興味深いお話をいただく中で、特に印象に残ったのは「戦後の日本が西洋文明社会の物質的な豊かさを求めて近代化を進めてきた過程で、伝統文化が置き去りにされてしまい、今ふと足元を見ると能楽、茶道、華道などの中にかろうじて伝統文化の残片が姿を留めているというのが現実のように思える。」という内容でありました。

人間国宝・大倉源次郎先生の目に、わが川上村や朝拝式はどのように映ったのでしょうか。あらためて地域の歴史文化に根ざした村づくりが肝心であることを強く感じた一日でありました。